

(5) コウチュウ目

選定・評価方法の概要

東京都下の昆虫相調査は、その立地から国内でも最初に昆虫の研究が着手された地域であることから、黎明期の日本の昆虫研究を先導した先達による多くの記録がある。しかし、戦後以降に「東京都」を主な調査対象とする継続した地方同好会が存在せず、地域の昆虫調査の記録発表を気軽に行える場がほとんどなかったことや、東京都を対象とした昆虫誌の編纂も行われたことがないことから、その全貌は近年まで明らかではなかった。

こうした状況の中、近年、松原豊氏らを中心に、東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト：東京昆虫目録（以下「TKM」とする。）が活動を始め、これまで難しかった「自分の採集した種が東京都下で記録があるかどうか」を手軽に参照できるようになった。当プロジェクトのおかげで、これまで眠っていた未記録種が日の目を見ることになった。2016年の更新版では甲虫類は3,560種が記録され、日々更新されているように、調査・研究とも活況を呈している（<http://tkm.na.coccan.jp/>, 2020年3月25日閲覧）。

選定・評価結果の概要

今回の東京都レッドリストの改定にあたっては、見直しに参加いただいた専門家の皆さんと、過去の選定の状況を調査し、根拠となる文献・標本をできる限り精査して全面的な見直しを試みた。実際に見直しに着手して痛感したのが、上記のように地方同好会が存在しなかったために、基礎となる分布情報が揃っている種がほとんど存在しない、ということであった。

さて、東京都レッドリストでは、他道府県ではほとんど例のない、地域を細分した評価を実施している（多摩地域：北多摩、南多摩、西多摩；区部）。こうした評価は、過去からの詳細データが存在する植物などの分類群や、種数が少ない両生・爬虫類などの分類群では選定が可能なのかもしれないが、甲虫類だけをとっても3,500種を超える膨大な対象を擁し、文献情報、基礎情報とも判断ができるような情報が存在しない分類群では科学的な判定を下すことはほぼ不可能である。

このため甲虫類では、まず東京都全体としての評価を優先して行うこととした。見直しの中では、過去の記録が不確実なもの、明らかな誤りなども散見された。また、区部で絶滅がそれに近い存在であっても、環境の残る多摩部ではごく普通の種も多い。例としてノコギリクワガタなどがあげられる。これらは現在でも東京都全体としてはごく普通に見られ、近い将来東京都下から絶滅することを想定する研究者は存在しない。しかし、区部では生息環境となる森林の消失から減少しているのは明らかで、前回（本土部レッドリスト2010）評価では区部NTランクが付されている。このように東京都下から絶滅の心配がない種は多く、これらについては、リストから除外するように努めた。一方、水辺環境の劣化から、環境省レッドリストでも、他府県のリストでも多くが掲載されている水生甲虫は、前回の掲載種が限定されていたので、TKMをもとに記録を見直したところ36種と大幅に増加した。このように、今回の選定作業にあたっては、レッドリストを「東京都」として今後の環境行政で利用していただくことを念頭に、限られた予算や人的資源を適切に配分し、保全対策の優先順位を考え、危機的状況の種を救う活動のために効率的に絶滅危惧情報を利用していただけるよう配慮した。

結果として、甲虫類では前回のリストからは大幅な変更が生じた。前回リストでは195種がリストアップされたが、今回リストでは175種となった。検討対象



ゲンゴロウ
日の出町 1973年
東京大学総合研究博物館所蔵

種数：274 種、新規掲載種数：69 種、削除種数：89 種となった。評価としては、本土部 EX：42 種、CR：47 種、EN：17 種、VU：25 種、NT：37 種、DD：7 種となった。

今回の改定作業において精力的に過去の記録の精査を行ったので、担当部署での資料の管理・引継ぎを継続してもらえば、次回改定では我々が今回苦労したような状況はほぼ解消できたものと思われる。一方、絶滅危惧状態を判断する基礎情報の絶対的な不足は深刻で、次回改定時には、せめてランクが高い種については、現地調査をきちんと実施できるだけの時間的、予算的な余裕を持った改定作業を目指したい。とくに、水生昆虫では都内では稀有な水環境が残された皇居やその周辺だけに生息する種が多くある。科学的評価を行うためには、前回調査から年月が経過している皇居内の現状についても把握することが重要であろう。

東京都は、戦前から大規模な緑地が公園として残されてきたことは、大きなメリットである。また、特に多摩川のように一時は死の川と評されるほど汚染が激しかった河川で、水質改善の努力が実り、現在では多くの生物が戻ってきていることは環境行政として高く評価されることであろう。30 年ほど前の洗剤で泡立つ川を見ていた筆者も現在の多摩川を見ると感慨深いものがある。東京都のような大都市を抱える地域に残された貴重な自然を後世に伝える努力を引き続き実践していただきたい。

(荻部 治紀)

写真提供者

東京大学総合研究博物館